エコカ 古民家再生と独自設計の給湯システム

ヘメンディンガー・エリックさん 大阪府泉佐野市

古民家を自力でリフォームし、薪ストーブを改造して給湯システムを独自に開発したフランス人のエリックさん。地域とエコへの思いを聞いた。

1　家主のエリックさん。　2　キッチンの床は製材から全て手づくり。　3　オーブン機能付きのストーブ。

ヘメンディンガー・エリックさんが住む家は、築70年の古民家。リビングとキッチンの床、家具、シンクなど、家具はほとんどエリックさんの手づくりだ。なかでも一番の大作は、アイルランド製の薪ストーブを改造した給湯システム。「フランスでは真冬でも家が暖かいのが当たり前。日本家屋の冬の寒さは耐えられません。ストーブの上でやかんでお湯を沸かしているうちに、これを貯めればお風呂に使えるかも、と思ったんです」とエリックさん。

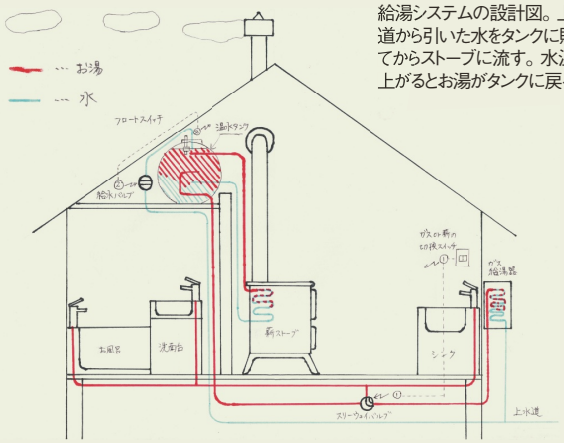
ストーブのファイヤーボックス（薪を入れる窯）の壁を外すと銅のコイルが見える。「上水道から引いた水は、コイルを通って窯の中でゆっくり温まります。床下で既存の水道管と接続し、皿洗いに温水を利用しています」

タンク内の水量が減ると自動的に給水するフロートスイッチを設置した。また、薪ストーブを利用しない日は給湯器のお湯も使用できるように、スイッチで切り替える工夫も施した。

手の込んだシステムに思えるが、エリックさんはオール電化の家で育ったため、生活に利用する温水を貯めておくことに馴染んでいた。薪ストーブを新調する際、ストーブの原価をメーカーのホームページで調べていたら、ボイラーシステムが販売されているのを発見。問い合わせると、本国アイルランドではボイラー機能をオプションで設置することができるが、日本では輸入規制があり設置が不可能と判明。その瞬間、エリックさんのDIY魂に火がついた。

というのも、日本家屋の暖房費は馬鹿にならない。もしガスストーブで暖めたら、ひと月で約3万円もかかる。一方、ストーブに使用する薪は、知り合いの材木屋さんから木材として使えない端材を譲ってもらうため、0円。給湯システム開発にかかったコストはわずか約12万円とリーズナブル。「うちはガス暖房を使うので、電気代よりガス代の方が高かった。だからまずガス代を減らすことを考えました。エコノミー（経済的）であることは、エコロジーにもつながると思います」

小学校で日本の森林と木材の利用についてレクチャー。



給湯システムの設計図。上水道から引いた水をタンクに貯めてからストーブに流す。水温が上がるとお湯がタンクに戻る。

エリックさんは数年前から近所の小学校で、木材の利用意義を伝える〝木育〟教育も担当している。昔から日本人は木を資源として建築材や薪炭に使っていたが、輸入材などに価格の面で負け、日本の森林が荒れて久しい。現代の子供は無垢（むく）の木に触れる機会も少ない。「子供にこそ、ほんものの良さを知って欲しい」と、杉や檜などの木片を生徒に渡し、匂いや木目を体感してもらい、マイ箸やネームプレートづくりの指導を行う。「マイ箸やネームプレートをつくる際、やすりで木を磨くと表面が熱くなります。手を加えることで、熱エネルギーが発生しているんです。ものを消費するのは簡単だけど、つくるのはとてもエネルギーが要る。その苦労を知って、木を大切に使って欲しいと思います」

（北村 綾）

タンクを設置する様子。タンクは知り合いから譲ってもらった。

銅のコイルをつづら折りに設置し、水がゆっくり流れるように工夫。